

「新しい東北」官民連携推進協議会
令和5年度 岩手県意見交換会（第3回）議事概要

令和6年1月22日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】令和6年1月22日（月）13:00～15:00

【場 所】復興庁岩手復興局／オンライン（Teams）

【出席者】（敬称略）

＜副代表団体＞（所属の五十音順）

株式会社岩手銀行／岩手県／国立大学法人岩手大学／特定非営利活動法人いわて連携復興センター

＜復興庁＞

復興庁 復興知見班／復興庁 岩手復興局

＜事務局＞

株式会社 JTB 総合研究所

【議事概要】

1 開会

復興庁より、本年度行ってきた実践の場を振り返り、評価点、反省点について忌憚のない意見をいただくとともに、来年度に繋がるような議論をお願いしたい旨、挨拶した。

2 各団体の活動紹介

復興庁、国立大学法人岩手大学、岩手県より、取組紹介資料（資料2-1～資料4）を基に取組を紹介した。

3 実践の場の開催結果を踏まえた意見交換

（1）今年度の振り返り

本年度の取組について、参加した若者が自分たちで訪問したいところを考え、現地の方から直接話を伺って気づきを得ることができたという点で良いプログラムであったとの評価を得た。

反省点として、周知の開始時期が遅く、参加者が集まりにくかったことが挙げられた。周知のタイミングを早めたり、いわて高等教育コンソーシアムの事務局に連絡を行ったり、本年度の参加者の感想もまじえて企画内容を説明したりするなどの工夫が必要であるといった意見、また、参加者のターゲットを絞り込むと良いのではないかという意見が得られた。

取組当日の行程や内容に関しては、現地の方々とはより一層連携し、参加者に多くの出会いや体験を提供できる体制にすることが課題として挙げられた。

（主な意見）

- ・広がりをつくる意味でもっと多くの学生、若い方に参加していただきたかったと思っている。参加者の面が反省点かなと思う。
- ・若者らしきみたいなどころを考えたときに、参加者同士で集まって「ここはいいね」というところを自分たちで考えたことはやり方としてとても良かったと思う。ただ、選択する中で情報としていたのは既存の観光パンフレットなどが多かった。プラスアルファで開拓するというか、今後新しい観光のコンテンツになり得る可能性がある場所や人を事務局や知っている方々が提案して、そこも「じゃあ試しにトライアルしてみようか」ということで若者の感性での意見や感想を得ることができると、内容により広がりが出るのではないかと思った。

- ・周知をもう少し早い段階で行うとか、若者がリストだけ見ても行きたい場所がない、そもそも関心を持ってないというところがあるのであれば、もう少しわかりやすく説明するということもしていかなければいけないと思った。例えば大学に「学生さんに案内してね」と言うだけでなく、詳細を踏まえて説明する人を付けるなど、来年度はそういった工夫もできるといいと思う。
- ・良い企画だったが、復興のサークルに説明したり、学生向けの SNS でも丁寧に説明して何度か連絡したりはしたが、なかなか学生に届きづらかったという反省がある。例えば学内で説明会を設けたとしても、そこに来るまでの興味を示すかどうかはなかなか難しいところだ。
- ・アンケートの結果は非常に良かった。1年目なので具体的な中身は説明しづらかったところがあるため、次年度は今回このプログラムに参加した方々の「こんなところに参加して、こう思った」「こんなところが良かった」という具体的な感想を入れたものでアタックすれば届くかもしれないと思った。
- ・次年度は岩手大学、県立大学、盛大、富士大、一関高専などが入っているいわて高等教育コンソーシアムの事務局に早い段階から一齊にご連絡することも必要なと思っている。
- ・注目したいのは「事前ワークショップを介して参加者に行程を考えていただく方法を取ったことは、各地域の理解を深め、ツアー当日の充実度を高めることに効果的であった」ということだ。県内の参加者が中心だったが、どうしても身近にあるもの、県内にあるものは本当の良さに気づきにくい。こういったことで県内のコンテンツ、地域への理解を深めたことは、今後岩手の魅力を若者が情報発信する上で非常に貴重な体験になったのかなと考えている。
- ・体験プログラムがとても良かったと感じている。個人旅行では難しい体験として、現地の方のお話を直接伺うことができたということは、これだけに留まらない形で、今後も沿岸の方でそういったものでお金を稼ぐなり何なりするような手段が取れるといいのかなと考えている。
- ・進める上での改善点として、せっかく良い取組をしているので、何か目に見える成果物とか、現地の仕事を体験するような取組、副業体験みたいな形も検討していけばいいのではないかなと思う。
- ・「若者や女性」とひとくくりにしているために、曖昧で狙いが定めにくくなっているのかなと思う。参加者を集めるときにかなり苦労したというのも、そういうところに起因しているのではないかなと思った。学生でも、観光を専攻している専門学校の学生をターゲットにする、震災教育をやっていかなければいけない先生をターゲットにするなど、ターゲットの絞り込みをもう少し明確にしていっていった方がいいのではないかなと思う。職業体験というの、どういう学生さんに声をかければいいのかという対象の絞り込みの一助になると感じた。
- ・当日学生に同行するスタッフを事務局から1人付けたが、現地の情報をどこまで知っているかという点も不十分な部分もあった。例えば当日に少し時間が余ったというとき、そこで何をするかという点も大事。そうしたときに自身の知識や既存の関係性を活かして現地の方の話を膨らますなどができれば、学生だけで回るよりも良いものになったのかなと思う。現地側のコーディネーターなど、当日現地で動ける人たちとどこまで連携できるのかというところが課題と感じた。
- ・非日常的なツーリズムの中で、参加した方がどう気づきを持つのかというのは、サプライズであったり、その場で偶発的な何かがあるということが肝心ではないかなと思う。行ってみたいという初動がありながら、それをどうやってコーディネートしていくのかということを少し連携するというか、それは事前の企画ですべてを決めるのではなくて、現地で柔軟にアレンジするという形の方が、クチコミで広がるのではないかなと思った。
- ・人集めについては、初めから広く広報を行うことも考えられると思った。1つの案だが、岩手わかすフェス実行委員会というのが立ち上がっている。岩手出身で東京にいる社会人や大学生が岩手の魅力を話そうというイベントを毎年やっている。そういうところを上手く活用すると、参加者の集客につながるのではないかなと思った。

(2) 次年度の取組内容

次年度については、基本的にこの取組を継続すべきということで合意が得られた。

取組を続けるにあたって、周知時期の早期化、テーマを設定した上での行程の企画・参加者のアプローチ、大学生以外の例えば地域おこし協力隊等に対する参加者募集の充実、現地の NPO 団体等の協力の打診等の意見があげられ、引き続き事務局で検討していくこととした。

また、次年度以降取組を進めていくにあたって、最終的な出口について整理すべきという意見があげられた。各団体の取組との連携等を含め、引き続き関係者間での合意形成を進めていく。

(主な意見)

- ・本年度はまず沿岸と内陸という話と、岩手県としても若者や女性に力を入れているという背景、先入観のない方にツアーを作ってもらおうというイメージもあったので「若者・女性」ということでスタートしたと思う。振り返りとして、準備期間が短かったということがあるので、できれば令和6年度も今回やったようなイメージで比較していき、早めにスタートするような形で進められれば、もう少し効果が出せるのかなと思った。
- ・令和7年度以降は、民間の事業者が真似したくなるようなモデルを作れるといいと思う。ジャストアイデアだが、例えば沿岸の女性起業家を巡るとか、一次産業をテーマにした沿岸のツアーなど、もう少し絞り込んだツアーを作っても面白いのではないかなと思う。
- ・若者と言ってもいろいろな趣味・関心、属性があるかと思うので、ターゲットを絞るというのは、皆さんのおっしゃる通りかなと思う。
- ・同じような企画を来年度も早い段階から進められたらいいかなと思う。今回は地域に絞ってツアーを組んだが、地域ではなくもう少しジャンルやテーマで絞ると、周知の段階で具体的なイメージができて、参加したいという方が増えるのではないかな。
- ・今年度の取組を継続していただければと思っている。「沿岸と内陸を繋ぐ」というのは距離だけではなく、アンケートにも出ていたように、沿岸の方にお話を聞いたということが重要なのかなと思う。人を繋ぐ際の箱として、こういったツアー形式は有効ではないかなと考える。その際、無理に沿岸すべてを網羅するというのではなく、人を繋ぐ、深く知するという意味であれば「今年はこの地域で」というふうにしてもいいのではないかなと思う。
- ・本年度の取組を来年度も継続して実施していけると良いのかなと考えている。資料に書かれている「岩手県沿岸部の魅力発信や事業者連携の創出に繋がるポテンシャルを秘めている」は、まさにその通りだと思うので、課題が見えたところで、その課題をさらに克服するような形で持っていければ非常に良いものになるのではないかなと期待ができる。
- ・とても面白い取組なので、来年度もやってみてもいいのではないかなと思う。ある程度継続しないと改善等が行えないということもあるし、今回行き先を考える際のリストを読ませていただいたが、知らないことばかりで大変勉強になった。
- ・反省点として、人数が増えた場合の受け入れ側のリソースという話があったので、NPO 団体などとの連携も含めて検討してみてもいいのかなと思う。
- ・周知に際して、やはり社会人は忙しいなという印象を受けた。今どきの大学生も忙しいという話を伺っているので、時期を早めたところでやはり参加は難しいというケースも出て来るのではないかなと思った。時期というよりは内容の方が大事なのかなと思う。
- ・基本的には、続けていくことに異論はない。1つ気になるのは、最終的な着地点はどこかということだ。こうして若者を呼んでツアーをやって、ある程度ツアー商品として自立できるようにしたいのか。それとも教育教材としての活動という形にして、学校から請け負うような形にしたいのか。その辺りのイメージを持ちながらやっていただいた方がいいのではないかなと思う。

- ・学生は9～10月は夏休み中で、サークル活動やアルバイト等がある。そこは厳しいのかなと思いつつ、一方で告知を早めにすれば、1泊2日の数日間であれば空けて参加することもできる。スタートが早ければ9月辺りでもいいのかなとは思っている。ただ、告知する期間を多めに取つつ、告知する内容、具体的にどういったものをやるとか、「昨年度はこういったことをやりました」という中身が学生に届くような企画を練ることが大切だと思う。
- ・学生中心とした企画でいいのかな？と思っている。同じ年代でも属性が違うといろいろな意見が出るのではないかなと思うので、もう少し門戸を広げた形でもいいのかもしれないと思った。地域おこし協力隊の方々も、岩手にどういう特徴があるのかを知りたい、横の繋がりを持ちたいなど関心が高い。協力隊は比較的若い方が多いので、協力隊の方々にアクセスすると結構参加してもらえるのではないかなと思った。学生だけでなくもいいのかなとも思う。そう考えると早い段階に告知して、事前のワークショップも1回で足りなければ2回やるなどして、9月とか10月にやってもいいと思う。ターゲットをどういうふうにするのかということ、最初に議論してもいいのではないかなと思う。
- ・誰にでも参加いただけるようなレジャーとしてのツアーということも今回は強かったかなと思うが、ターゲットを絞るという意味でいくと、興味の強い方に来てほしい。一次産業の方とか女性起業家という絞り方をした方がターゲットを絞れるというか、そういったことに対して関心の高い方が来てくださるかなというふうに思った。参加者の方も研究したいことや仕事にしたいことに近いテーマになるので、お互いどちらにも参加するメリットがあるのかなと思った。
- ・実際に宮古に訪れていた学生は都市計画の学部の院生で、被害を受けた沿岸地域がどう再生していくのかということに興味があったということだ。ジャンルの絞り込みは、若者にとってはわかりやすいのかなという気もしている。
- ・ターゲットやテーマの絞り込みという話は、次年度の検討の際の参考になると感じたが、一方で実現に繋げていくにはどうすればいいのか、考えなければいけないことも多いと感じている。事務局サイドで回していく部分も考えると、そのテーマごとの協力団体みたいなところがないと、なかなか進めていくのが難しい部分がある。例えば大学の研究室単位でそういうところと協力できるのであれば、ある程度それが形になって将来的にはゼミ旅行や合宿、大学のカリキュラムなど、そういった取組で地域に根差していただく形になれば、面白い発展形なのかなと思う。地域おこし協力隊の話でいうと、地域おこし協力隊のネットワークをどう作るかみたいなのところに取り組もうとしている団体がまさにあって、何をやればいいのか迷っているということであれば、協力していくことができる。主としてかかわっていただけそうな団体という視点として大事なのかなと思っている。
- ・研究室の取組となると、指導教員とも擦り合わせをしないといけない。数もたぶん少ない。県内の大学の研究室の取組でこの企画を閉じていいのかな？というか、これほど参画しているわりにはスケール感が狭くなってしまうと思う。地域おこし協力隊の話は、学生ではないフェーズの方もいるので、絞るよりは少し幅広くしてもいいのではないかなという意味でご紹介した。一方で幅広く募集をするとターゲットがぼやけてしまう懸念はあるが、今回、実際に声掛けをしてみて絞って届けてもなかなか申し込みがなかった。
- ・目指すところはこういったところなのか。個人的には、かっちりとしたツアーモデルを作って自立化することを目指してはいない、と思いつつ参加していた。
- ・最終的な出口として、旅行プランを作るという形に持っていくのかというと、それに限った話ではないと考えている。意見交換会での議論という官民協働のスキームの中で、岩手県の取組については、「これまでの魅力発信や事業者連携が足りていない」ということを最初の大きな課題として、その解決に向けた一助として取組を実施してきた。このため、ここで作ったプラン自体が残っていないかと絶対にダメだということではないが、協議会のサポートがなくなった後、やって良かったという感想はあるけれどもお金もないのでやらないということになってしまうと、本来の「岩手県

の魅力発信や事業者連携が不足しているということにどうアプローチするか」という地域課題が解決できない気がする。そこにどう関係者間で連携して取り組んでいくのかというところが大事なのだろう。

- ・最終的に商品にするのは専門の方がやられるのだろうが、長期的に見ると、こういった研修旅行や教育旅行で地元の人たちが潤わないとやっていかれないだろうということは直感的に思う。そういう見通しが立てばエージェントにお任せすればいいと思う。そこに行くまでの「ああだ、こうだ」というのをこの協議会でやればいいのかなと思う。その間のところをどうやって詰めていくかというのがミソなのだろうと思う。
- ・第2期復興・創生期間が令和7年度までなので、令和8年度以降の話、着地点の話は共通する話だと思うが、今後は予算や人員の面でどこに引き継ぐかというのは非常に大きな問題になってくる。今やっていることをそのまま引き継ぐのはなかなか難しいのではないかなと思う。着地点としては、今回の取組を簡単なマニュアル化、モデル化して「こういう取組をする場合に注意しなければいけない点」などを含めて、様々なジャンル、業界の方がフリーに使えるような冊子などを作るのも1つの手かなと思う。

4 閉会

第3回意見交換会では、次年度も本年度の取組を継続していくことで合意が得られた。今回の議論の内容を踏まえ、一定のテーマを設定し、参加者を広く募集しつつ、ターゲット層を決めた個別アプローチも探っていくという方向性に沿って、事業設計を進めていく。